

# 小沢蘆庵編『袖中和歌六帖』の成立

三 村 晃 功

## 一 はじめに

筆者は近時、古典和歌を例歌（証歌）として収載する、近世期に成立した類題和歌集の研究を進めているが、その近世期に成立をみた類題集たるや種々様々で、百花繚乱の様相を呈している。そのような多彩を極める近世類題集のなかで、筆者がこのたび組上に載せたのが、小沢蘆庵編『袖中和歌六帖』（再刊本『類題和歌六帖』）である。

ところで、類題集の研究をテーマに採択した際に、まず想起されるべき作品が、類題集の嚆矢たる『古今和歌六帖』である事実を考えると、筆者が「六帖題」の類題集をこれまで検討対象に選ばなかったのは、遅きに失した感じを否めまい。

ちなみに、「六帖題」とは、平安時代に成立した『古今六帖』で採られた、六帖に分類した歌題をいうが、時代が下るに従って、ひとつの類型とされるに至った。その「六帖題」の内実は、第一帖が四季・天、第二帖が山・田・野・都・田舎・家・人・仏事、第三帖が水、第四帖が恋・祝・別・長歌・旋頭歌、第五帖が雑思・服飾・色・錦綾、

第六帖が草・虫・木・鳥のとおりだが、この「六帖題」は同時代の人びとに珍重されて、『源氏物語』『枕草子』などの文学作品に影響を与えるほか、鎌倉時代に入ると、『新撰和歌六帖』『現存和歌六帖』『東撰六帖』など、六帖題の私撰類題集が陸続して撰進されるに至ったことも、周知の事柄であろう。

さて、当面の小沢蘆庵編『袖中和歌六帖』（以下、本六帖と略称する）の研究史をたどるならば、『和歌大辞典』（昭和六一・三、明治書院）に、

袖中和歌六帖かうちゅうかうくでふ〔江戸期類題集〕小沢蘆庵撰。安永初年（1772）成立、寛政八1796年小川布淑の序を付して同九年刊。半紙本二冊。薄葉の中本一冊本や類題和歌六帖と題する天保一二1800年の再版本も同版。古今六帖と新撰六帖の題ごとに五首を撰び、時に他の歌集からも補って歌人の参考としたもの。（福田秀二）

のごとき、簡にして要を得た記述を見出しうる一方、再版本の『類題和歌六帖』については、同辞典に、

類題和歌六帖かうくでふ〔江戸期類題集〕小沢蘆庵編。安永1772～1781の頃、古今六帖・新撰六帖の題によって、一題五首の簡略な類題を作成した。これを小川布淑が寛政七1795に二冊本として刊行した。（築瀬一雄）

のごとき、少々誤謬を含む記述も見出される程度であるので、本六帖については、さらに詳細な考察が要請されるであろう。

そのようなわけで、本稿は、例によつての蕪雑な作業報告の域を出ない代物ではないが、これまで辞典類以外には言及されることのなかった『袖中和歌六帖』について、このたび、成立の問題を中心に据えて具体的な検討を加えることを得たので、大方の厳しいご批評が得られるならば、幸甚に思う次第である。

## 二 書誌的概要

さて、本六帖の伝本については、『私撰集伝本書目』（昭和五〇・二一、明治書院）に、

244 袖中和歌六帖 小沢蘆庵

袖中和歌六帖 二 寛政九刊 東北大狩野文庫・大橋・東大・京大研・徳島県・大洲市矢野玄道本・福井

久蔵・福田秀一 二部

袖中六帖 二 寛政九刊 慶大

のとき紹介記事が見出され、版本で流布していることが知られるが、本稿では宇部市立図書館新井文庫蔵の寛政九年刊の版本を底本にして以下の考察を行った。

なお、底本については、未見であるため、国文学研究資料館蔵のマイクロ・フィルムに依拠して調査、検討したことを断っておきたいと思う。

国文学研究資料館蔵のマイクロ・フィルム番号 268—76—2

所蔵者 宇部市立図書館新井文庫 蔵（911—10—0—1—2）

編著者 小沢蘆庵

体裁 中本（縦二・四センチ、横一〇・五センチ） 二冊 版本 袋綴じ

小沢蘆庵著

袖中和歌六帖上（下）（後補）

内題 なし

匡郭 单郭

各半葉 九行（歌一行書き） 序・跋・目録・凡例など九行

総丁数 百九十七丁（上冊・九十二丁、下冊・百六丁）

総歌題数 五百五十題（第一帖・百題、第二帖・八十五題、第三帖・六十題、第四帖・二十一題、第五帖・百十八題、

## 第六帖・百六十六題

総歌数 二千六百九十二首（第一帖・五百首、第二帖・四百二十三首、第三帖・三百首、第四帖・百五首、第五帖・五百九十首、第六帖・七百七十四首）

## 柱 刻 なし

## 序 小川布淑

凡例 小川布淑（此書見んやう 寛政八年正月）

跋 小沢蘆庵（寛政七年仲冬二十日）

刊記 観荷堂藏／寛政九年<sup>丁巳</sup>六月／御書館／二条通沿小路東入町 吉田四郎右衛門

印記 「新井藏書」（正方形）「宇部市立図書館藏書印」（同）「新井文庫」（長方形）など

書入れ 寛政板 「明治二十二歳四月三日求之」（消去） 本書全二冊名古屋市中堂書店ヨリ購入セリ 価一円二十

錢／大正十五年三月廿四日 新井泉峰 二冊之内（上・下見返し） 下御熊村／早川有容（上・下裏表紙表）

以上から、本六帖は第一帖・五百首（百題）、第二帖・四百二十三首（八十五題）、第三帖・三百首（六十題）、第四帖・百五首（二十一題）、第五帖・五百九十首（百十八題）、第六帖・七百七十四首（百六十六題）からなる、都合二千六百九十二（五百五十題）首を収載する中規模の類題私撰集と知られよう。

ちなみに、『類題和歌六帖』の刊記は「天保十一年／子初春補刻発兌／書林／江戸浅草茅町二丁目 須原屋伊八／大坂心斎橋北久太郎町 河内屋喜兵衛／同唐物町 河内屋太助／京寺町四下ル 山城屋佐兵衛／尾州名古屋本町十丁目 松屋善兵衛」のとおりで、天保十一年初春、『袖中和歌六帖』を改題して再刊していることが知られよう。

## 三 構成内容

さて、本六帖の書誌的概要については以上のとおりだが、本六帖の内容はいかなる構成になっているであろうか。その点について概略を示せば、

- 1 序文・小川布淑
- 2 凡例（此書見んやう 寛政八年）・小川布淑
- 3 目録
- 4 本文
- 5 跋文・小沢蘆庵
- 6 刊記（寛政九年）

のとおりであるが、それでは、本六帖の版面構成はどのようなになっているのか、巻頭の二丁分（オ・ウ）を抄出して、その点の紹介に及んでおこう。

春たつ日 第一帖

- |       |   |     |
|-------|---|-----|
| 古今元方  | としの内に春はきにけり一とせをこそとやいはんことしとやいはん          | (一) |
| 同 貫之  | 袖ひちてむすびし水のこほれるを春立けふの風やとく覧               | (二) |
| 貫之集   | としのうちに春立ことをかすがの、わかなさへにもしりにける哉           | (三) |
| 拾遺忠岑  | はるたつといふばかりにやみよしの、山も霞てけさはみゆらん            | (四) |
| 古マサズミ |   |     |
| 菅家万葉  | 山 <sup>登</sup> かぜにとくる氷のひまごとに打すづる波やはるの初花 | (五) |
| むつき   |   |     |

万葉志貴皇子 ミヤノキミ いはそゝくたるひの上の早蕨のもえ出る春になりにける哉 カモ  
 新古今集

古 忠ミね 春きぬと人はいへども鶯のなかぬかぎりはあらじとぞ思ふ

古 言直 春やとき花やおそきと聞わかん鶯だにもなかずも有かな

万十 今更に雪ふらめやもかげろふのもゆる春ハ夫べと成にしものを

新古 〇 うぐひすの冬籠ハ夫してうめる子は春のむ月のなかに杜なけ

未木 二 ついたちの日 あら玉のとし立かへる朝よりまたましものはうぐひすの声

拾 家 ソセイ きのふこそ年はくれしか春霞かすがの山にはや立にけり

万十 〇 昨日フナ家より後をばしらず百年の春の始はけふにぞ有ける

貫 家 風雅 貫 あたらしく明るトシラバ風こよひを百年の春の始と鶯ぞなく

拾 家 重之 よしの山みねしら雪いつ消てけさは霞の立かはるらん

この版面構成からみて、本六帖ではまず、和歌本文より二字下げて歌題表記がなされた後（各帖の注記のある場合がある）、次の行の上位に集付（出典注記）が付されて、同じ行に二マス下げて和歌本文が示される、という体裁が採られている。ちなみに、この構成内容は、さきに指摘した「2 凡例（此書見んやう）・小川布淑」の基準によって記述されているので、次に、本六帖の凡例の役割を担っている「此書見んやう」を引用しておこう。

此書見んやう

一 題は『古今六帖』『新撰六帖』をいわず。『古帖』になくて『新撰』にのせたるは、「てん」をかく。

一 歌は證となるべきをのす。『新撰』又は余集よりいだせるは、是も「てん」をかく。

(六)  
(七)  
(八)  
(九)  
(一〇)  
(一一)  
(一二)  
(一三)  
(一四)  
(一五)

- 一 『万葉集』作者不詳、撰集よみ人しらずの哥には、「まろきしるし」をつく
- 一 出所紹介、異同題下の注、すべてさながら契沖の説なり。
- 一 『万葉』、三代集は、集の名一字をのす。作者もあらはなるは、これにならふ。
- 一 「△」此しるしの下に本字をかき、又は、かななづかひ、「万葉」「和名」等を書入たるは、師翁の此たびつけらるゝなり。

寛政八年正月

小川布淑記

そこで、この本六帖の凡例に従って、さきに引用した「春たつ日」「むつき」「ついたちの日」題から各々、一例を引き合いに出して解説しておく。

まず、「春たつ日」題の(五)の詠は、『古今六帖』に読人不知の詠(五)として載るが、頭注の「古マサズミ」は『古今集』に「源まさずみ」(一二)とある作者注記によって、また、初句の校異を示す「谷古」なる注記も、同集に「谷風に」にとあることから各々、正鵠を射ていると確認されるが、「菅家万葉」の頭注は『新撰万葉集』(菅家万葉集)に読人不知の詠(二三九)として載る一方、初句は「谷風丹(に)」とある点で、初句の異同注記に遺漏が認められると言えようか。

次に、「むつき」題の(六)の詠は、『古今六帖』に「志貴皇子<sup>かがみの王女とも</sup>」(七)の歌として載るが、頭注の「万葉志貴皇子」は『万葉集』に「志貴皇子」(一四二二)とある作者注記によって、また、第二句・結句の校異を示す「ミ万下同」「カモ」の注記も、同集に各々、「垂見之上乃(たるみのうへの)」「成来鴨(なりにけるかも)」とあることから、それぞれの射ていると確認される一方、『新古今集の』頭注は、同集の第二句が「たるみのうへの」の措辞をもつ点で、校異として付された「新古」の注記が正鵠を射ているものの、作者注記の点では、同集が「志貴皇子」とする表記を無視している点で、瑕瑾を指摘しうるようだ。

最後に、「ついたちの日」題の（二二）の詠は、『古今六帖』に「山辺赤人」（一七）の歌として載るが、『万葉集』の卷十に読人不知の詠（一八四七）として収められていることを意味する、頭注の「万十　○」が、同集で内容的に実証されるほか、「拾　赤人」の頭注も、『拾遺集』に「山辺赤人」（三）とある作者注記から、各々、確認されるようだ。

そして、この頭注の内容を、「賀茂別雷神社三手文庫蔵板本古今和歌六帖契沖自筆書入本を翻刻した」『契沖全集 第十五卷』（昭和五〇・一二、岩波書店）に収載の「古今和歌六帖題一」の当該部分（879～883・885・886～888）と比較してみると、出典表記などに繁簡の差が認められるものの、内容的には符合しているので、本六帖の「見んやう」の「一　出所紹介、異同題下の注、すべてさながら契沖の説なり。」の記述はおおむね信用がかけると判断されようか。

ちなみに、「△」の符号については、「をぎ」（第六帖）題の注記として「△荻　和名　乎木」とある記述から確認される一方、「てん」の符号については、『新撰六帖』にみられる「あかつきやみ」の題および例歌（三三六～三四〇）などに、合点が付されている事例などから、確認されるであろう。

#### 四　歌題の問題

本六帖の構成内容については、大略、上述したとおりだが、それでは、本六帖に収載される歌題はいかなるものであるうか。本六帖の歌題については、さきに言及したとおり、総歌題数は五百五十題で、各帖別には第一帖・百題、第二帖・八十五題、第三帖・六十題、第四帖・二十一題、第五帖・百十八題、第六帖・百六十六題のごとくである。ところで、この問題については、さきに引用した「見んやう」の「一　題は『古今六帖』『新撰六帖』をいず。『古



帖』になくて『新撰』にのせたるは、「てん」をかく。」が示唆を与えるが、本六帖において実際にそのようになったているのか否かを確認してみると、実は、以下のような例外も指摘されるようだ。それは「目録」の「草 第六帖」に「已上九題『新』『古』共目錄ノセズ」の注記が付記されている「ねなし草 も、よ草 さしも草 おほゐ草 かくも草 つれなし草 しり草 ねつらくさ」の歌題であるが、以下に該当する歌題に関係する本文を引用してみよう。

ねなし草 以下九種不載『新六帖』

1 わがよ、も千よにあらめやねなし草たはれやせまし身のわかい時

(未、一九五三)

2 あすしらぬみむろの峯のねなし草何あだしよに生はじめけん

(千・小大進、一九五四)

も、よぐさ 采要 目安 月草也

3 ち、は、が家のしりへのも、よ草百夜いでませわがいたるまで

(万二十、一九五五)

4 露しげき家のそのなるも、よ草も、よ妹こひ袖ぬらしつも

(新六雑草・光、一九五六)

5 も、夜草も、よまでなどたのめけん仮そめぶしのしぢのはしがき

(六百番・顯昭、一九五七)

手向草 非草名カタラヒグサノ類也

6 しら浪の浜松がえのたむけ草幾世までにか年のへぬらん

(万一又九、新古・河嶋皇子、一九五八)

さしも草

7 あぢきなやいぶきの山のさしも草おのがおもひに身をこがしつ、

(未、一九五九)

8 ちぎりけん心からこそさしもぐさおのがおもひにもえわたりけれ

(未、一九六〇)

9 なほざりにいぶきの山のさしも草さしも思はぬことにやはあらぬ

(同、一九六一)

10 しもつけやしめつチガ夫の原のさしも草おのが思ひに身をや、くらん

(未、夫木廿八、一九六二)

11 さしも草さしもしのばぬ中らば思ひありともいはましものを

(同・俊成、一九六三)

おほる草 莞 和名 於保井 日本紀 莞子 加麻

12 かんつけのいならの沼のおほる草よそにみしよは今こそまされ

(万十四、一九六四)

13 河千鳥なくや河べのおほる草すうちおほる一夜ねさせよ

(清輔集、一九六五)

かくも草 △黄連 可久未久佐

14 うかりけるみぎはがくれのかくも草葉末もみえず行かくれなん

(未、一九六六)

15 我宿にかくもをうゑてかくも草かくのみこひばわれやせぬべし

(おもひやすの題に有、一九六七)

つれなし草

16 としをへて何たのみけんかつまたのいけにおふてふつれなしの草

(未、一九六八)

17 かつまたのいけるはなにぞつれなしの草のさてしもおいにけるみよ

(知・ぎうの草、一九六九)

しりくさ △蘭 鸞尻利 和名

18 しほあしにまじれる草のとりにくさの人みなしりぬ我下おもひ

(万十一、一九七〇)

ねつら草 △目安 芝ノ如クハリノヤウナルクサナリ

19 芝付の見うるさきなるねつこ草あひみざりせば我こひめやも

(万十一・十四、一九七一)

20 紅のあさはの野らにかかる草のつかの間も我をわするな

(同十一、一九七二)

以上が本六帖の当面の歌題九題とその例歌(証歌)であるが、まず「目録」の「已上九題『新』『古』共目録ノセズ。」の注記と、本文の「以下九種不載『新六帖』」の注記の間に異同が指摘される点、編者の不用意な記述と言わざるを得ないので、その点について、集付(出典注記)を参照しながら吟味しておこう。

まず、「ねなし草」については、1が『古今六帖』の「ねなし草」の題下に載る(三五八三)一方、2が『千載集』

に「百首歌たてまつりける時、無常の心をよめる」の詞書のもとに「花園左大臣家小大進」の作者名（一一三二）を付して載る。

次に、「もゝよぐさ」については、3が『古今六帖』に同題で載る（三五八四）一方、4が『新撰六帖』に「ぎふの草」題で「光俊」の名（一九五〇）で、5が『六百番歌合』の四番左歌（歌題なし）として「顕昭」の名（二〇二七）で各々、掲載される。

次に、「手向草」については、6が『古今六帖』に同題で載る（三五八五）が、『万葉集』に、卷一と卷九に「川島（嶋）皇子」の名（三四・一七二〇）で、『新古今集』に『万葉集』と同じ作者名（一五八八）で各々、載るものの、歌題表記はない。

次に、「さしも草」については、7・10が『古今六帖』に同題で載る（三五八六・八九）が、11も『夫木抄』に「皇太后宮大夫俊成卿」（二三六四〇）の名で、「指焼草（さしもぐさ）」の題下に収載される。

次に、「おほる草」については、12・13ともに『古今六帖』に収載されず、12が『万葉集』に「右廿二首上野国」の左注下に収載される（三四三六、「柿本朝臣人麿歌集出也」）が、13は『清輔集』の「恋」題に収録される（二四九）一方、『夫木抄』には「莞草」の題下に「清輔朝臣」の歌（一三六二〇）として載る。

次に、「かくも草」については、14・15ともに『古今六帖』に載るが、そこでは14が同題で載る（三五九一）一方、15は「おもひやす」の題下（二九九六）に掲載されている。

次に、「つれなし草」については、16が『古今六帖』に同題で載る（三五九二）一方、17は『新撰六帖』に「ぎふの草」の題下に「知家」の歌（一九四八）として載っている。

次に、「したくさ」については、『古今六帖』に18が「つれなしぐさ」題の「人丸」の歌として載る（三五九三）が、『万葉集』には「寄物陳思」歌群の一首（二四七二）として載るのみで、歌題表記はない。

最後に、「ねつら草」については、19・20ともに『古今六帖』に収載され、ともに「つれなしぐさ」題の例歌（三五九五・三五九五）として載る一方、『万葉集』にも載る（三五二九・二七七三）が、作者表記は欠いている。

以上を要するに、『新撰六帖』からの収載歌は4のごとく抄出されてはいるが、歌題については「ねなし草」「も、よぐさ」「手向草」「さしも草」「かくも草」「つれなし草」の六題が『古今六帖』から引用される一方、この六題を含めてそのほかの三題も一切『新撰六帖』からは抄出、掲載されていないので、本六帖の注記としては、「目録」の記述よりも本文の記述のほうが正鵠を射えていると言えるであろう。

このような次第で、本六帖は原則的には『古今六帖』『新撰六帖』に収録される歌題を整理、統合して収めていると概略しえようが、以下には、煩を厭わずに、六帖題類題集の規範として、本六帖の歌題をすべて掲載しておくと思う。ちなみに、『新撰六帖』の題には「○」を、それ以外の題には「△」を付しておいた。

### 第一帖

春（春立日・親月・ついたちの日・のこりの雪・ねのひ・わかな・あを馬・なかの春・やよひ・三日・春のはて）  
 夏（初夏・更衣・卯月・うの花・神まつり・五月・五日・あやめ草・水無月・なごしの祓・夏のはて）・秋（秋立日・初秋・七夕・朝・葉月・十五夜・駒ひき・○あきのけう・○秋夕・なが月・九日・秋のはて）・冬（初冬・神無月・○冬の夜・しも月・かぐら・しはす・仏名・うるふ月・としの暮）・天（○あかつき・○あした・○ひる・○ゆふべ・○よひ・○よは・天のそら・てる日・春の月・夏の月・秋の月・冬の月・雑の月・三日月・夕月夜・○弓張・○望月・○不去宵月・○立待・○居待・○寝待・○廿日月・有明・夕やみ・○暁やみ・ほし・春の風・夏の風・秋の風・冬の風・山おろし・あらし・雑の風・あめ・○春の雨・○五月雨・ゆふ立・○秋の雨・○冬の雨・むら雨・しぐれ・くも・露・しづく・かすみ・霧・しも・ゆき・あられ・こほり・○氷室・火・けぶり・ちり・なる神・いなづま・かげろふ）

## 第二帖

山(やま・山どり・さる・しか・とら・くま・むさ・び・山川・山田・山ざと・山の井・山びこ・いはほ・みね・  
 たに・そま・をの・え・すみがま・せき・はら・をか・もり・やしろ・みち・つかひ・うまや)・田(春の田・  
 夏の田・秋の田・冬の田・かりほ・いなおふせ鳥・そはづ)・野(春の野・夏の野・秋の野・冬の野・さうの野・  
 かり・ともし・わし・大鷹・小鷹・きじ・はと・うづら・大たかゞり・小鷹がり・野<sup>野遊殿</sup>べ・みゆき)・都(み  
 やこ・都どり・百しき)・田舎(国・郡・里・古郷・やど・やどり・かきほ)・家(いへ・となり・井・まがき・  
 庭・にはとり・かど・戸・すだれ・とこ・むしろ)・人(おきな・おんな・○をうな・おや・うなゐ・わかいこ・  
 くるま・牛・うま)・仏事(○仏事・寺・かね・ほうし・あま)

## 第三帖

水(みづ・水どり・をし・かも・にほ・う・かめ・いを・こひ・ふな・すぎき・たひ・あゆ・ひを・かは・か  
 はづ・はし・ひ・ゐぜき・しがらみ・夜川・網代・やな・江・池・沼・うき・たき・にはたづみ・うたかた・  
 さは・淵・瀬・海・海人・たくなは・しほ・塩がま・ふね・つり・いかり・あみ・なのりそ・藻・みるめ・わ  
 れから・うら・かひ・なぎさ・しま・はま・浜千どり・はまゆふ・さき・いそ・なみ・みをつくし・かた・み  
 など・とまり)

(六〇題)

## 第四帖

恋(こひ・かたこひ・夢・おもかげ・うた・ね・涙川<sup>〔新〕川の子ナシ</sup>・うらみ・うらみず・ないがしろ・さうの思ひ・  
 ○おもひをのぶ・○ふるきをおもふ)・祝(いはひ・わかな・つゑ・かざし)・別(わかれ・ぬさ・たむけ・たび・  
 かなしび)

(二一題)

## 第五帖

雑思（しらぬ人・いひはじむ・としへていふ・はじめてあへる・あした・しめ・あひおもふ・あひ思はぬ・こ  
 と人を思ふ・わきて思ふ・いはでおもふ・人しれぬ・人にしらるゝ・よる独をり・ひとりね・ふたりをり・ふ  
 せり・あかつきにおく・一夜へだてたる・二夜へだてたる・物へだてたる・日比へだてたる・としへだてたる・  
 遠道へだてたる・うちきてあへる・よひのま・ものがたり・近くてあはず・人をまつ・人をまたず・人をよぶ・  
 道のたより・ふみたがへ・ひとづて・わする・わすれず・こゝろかはる・おどろかす・おもひいづ・むかしを  
 こふ・昔あへる人・あつらふ・ちぎる・人をたづぬ・めづらし・たのむる・ちかふ・口かたむ・人づま・家と  
 じを思・思ひやす・思ひわづらふ・くれどあはず・人をとゝむ・とゝまらず・なを、しむ・をします・なき名・  
 わぎもこ・わがせこ・かくれづま・になき思ひ・今はかひなし・こんよ・かたみ）・服饒（玉くしげ・たまか  
 づら・かみ・もとゆひ・くし・たま・玉のを・たまだすき・かゞみ・まくら・たまくら・はた・ころも・塩や  
 き衣・夏ごろも・秋の衣・衣うつ・かりごろも・すりごろも・あさ衣・かはごろも・ぬれぎぬ・ぎょうの衣・ふ  
 すま・裳・ひも・おび・ひとり・ことの葉・ふみ・こと・ふえ・ゆみ・や・たち・かたな・さや・はかり・あ  
 ふぎ・かさ・みの・かたみ・つと）・色（いろ・くれなゐ・むらさき・くちなし・みどり）・錦綾（にしき・あや・  
 いと・わた・ぬの）

## 第六帖

草（春の草・夏の草・秋の草・冬のくさ・した草・にこぐさ・ぎょうの草・ねなし草・もよくさ・たむけ草・さし草・△おほみ草・かくも草・つれ  
 な草・し草・ねつらくさ・上九題）新題「五」目録ナセズ・山ぶき・なでしこ・あき萩・をみなへし・すゝき・しのすゝき・をぎ・らに・  
 きく・草のかう・きちかう・りうたん・しをに・くたに・さうび・かるかや・かや・はちす・かきつばた・こも・  
 花かつみ・あし・ひと・ぬなは・ねぬなは・あさぎ・うきぐさ・つき草・わすれ草・しのぶぐさ・ことなし草・  
 せり・なぎ・たで・むぐら・玉かづら・くず・さねかづら・青つゝら・あさがほ・あさぢ・つばな・かにひ・あ

ぢさゐ・さこく・すみれ・をはぎ・わらび・ゑぐ・ゆり・あゐ・まさきかづら・ひかげ・山たちばな・すげ・さ・あふひ・かたばみ・みくり・よもぎ・こけ・いちし・しば・虫（むし・せみ・夏むし・きり／＼す・まつむし・すゞ虫・ひぐらし・ほたる・はたおりめ・くも・てふ）・木（木・しをり・はな・秋のはな・紅葉・は・そ・まゆみ・かへで・松・かへ・たけ・たかな・うめ・こう梅・柳・さくら・かにはぎくら・花ざくら・山ざくら・庭桜・ひざくら・ふぢ・たち花・あべたちばな・しひ・ぎくろ・なし・山なし・も・すも・からも・くるみ・すぎ・むろ・まき・かつら・かうか・あふち・かし・くぬぎ・つばき・かしは・ほ・がしは・ながめがしは・つ・じ・岩つ・じ・ひさぎ・くは・はたつもり・しきみ・あせみ・やまちさ・ゆづる葉・かたかし・つま・さねき）・鳥（とり・はなちどり・ひなどり・かも・鶴・かり・○かへるかり・うぐひす・ほと・ぎす・ちどり・よぶこ鳥・しぎ・からす・さぎ・はこどり・かほどり・かさ・ぎ・もず・くひな・つばくらめ）

（一六六題）

以上を要すれば、本六帖に収載をみる歌題は、「おほゐ草」「しりくさ」「ねつら草」の三題については『古今六帖』『新撰六帖』ともに収録しないが、それ以外の歌題はすべて両六帖に収載されるなか、就中、『古今六帖』に掲載される歌題が大半を占めている実態が窺知されるといえようか。

#### 四 例歌（証歌）の問題——出典と詠歌作者

さて、本六帖に収載される歌題については、大略、以上のとおりだが、それでは、本六帖に掲載される例歌（証歌）についてはいかがであらうか。この問題を検討するに際して示唆を与えるのが、「題ごとに五首を出されぬれば」と記述されている「序文」の記述ではなからうか。そこで、この視点から本六帖の例歌（証歌）を概観してみると、すでに言及した1～20の例歌（証歌）に示されているように、「ねなし草」が二首、「も・よぐさ」が三首、「手向草」

が一首、「おふゐ草」が二首、「かくも草」が二首、「つれなし草」が二首、「しりくさ」が一首、「ねつら草」が二首のとおりで、いずれも例歌（証歌）が五首未満である。

ちなみに、そのほかの歌題で、例歌（証歌）が五首未満である歌群は、以下のとおりである。

おんな △和名 姫・於無名 老姫称也

21 いにしへのおうなにしてやかくばかり恋にしづまんで<sup>タ方</sup>はらはのごと

（万四、八六一）

22 おちつもる松をひろひて年ふれば老のつま木と人やみるらん

（未、八六二）

23 百とせにおい<sup>シタ、ミデヨ、ム万下同イトハ</sup>くちひそみ成ぬとも我はわすれじ恋はますとも

（万四、八六三）

雑のくさ 梨渚云、以下九題惣標ノ下ニオケル別題ナル故、目錄ニ出サズ。前後二首 末題ノ心ヲアラハシ、其中サウ、メリ。

24 しほみてば人ぬる磯の草なれやみらくすくなくこふらくの多き

（万七・寄藻、浜成、和哥式、一九四九）

25 いたづらにふるの、沢にかかる草の心づからやよをなげくべき

（家・一九五〇）

26 みつの、のまきのひつぎのかり草のつかのまもなし恋の乱は

（為・一九五一）

27 みま草はくるともからんみこもりのみかひの岡のことのしげくさ<sup>モイ</sup>

（信・一九五二）

くさのかう 以下六種不載『新六』 ナス和名<sup>久佐之香</sup> 香草

28 草のかう色かはりぬる白露はこゝろおきても思ふべき哉

（伊セ・家、二〇一八）

29 しら露のいかにそむれば草のかうおく度ごとに色のますらん

（元真集、二〇一九）

きちかう △本草云、桔梗和名 阿里乃比布<sup>木</sup>

30 あきちかう野はなりにけり白露のおける草葉も色かはり行

（古・友則、二〇二〇）

31 秋の月ちかうてらすとみえつるは露にうつるふ光なりけり

（未、二〇二二）

32 あだ人のまがきちかうな花うゑそにはひもあへず折つくしけり

（拾〇、二〇二二）



りうたむ 龍瞻和名 衣夜異久佐一云邇加奈

33 わがやどの花ふみちらすとりうたん野はなければやこ、にしもくる

34 花しあらばかつきてをらん秋風に波たちかへりうたんなかにも

35 風さむみ鳴かりがねのこ糸によりうたん衣をまづやかまし

36 川上にいまよりうたむあじろにはまづもみぢばやよらんとすらむ

くたに △苦丹、契云牡丹類歟 不載和名

37 ちりぬれば後はあくたになる花を思ひしらずもまどふ今日哉

38 水上を山にておつる滝つせの雫のたえずそ、くたに陰

さうび △薔薇 和名 無波良乃異

39 我はけささうびにぞみつる花の色をあだなる物といふばかりけり

かにひ 此題不載『新六』

40 わたつ海の沖なかにひのはなれ出てもゆとみえしは蟹の漁火

41 かた岡にひのはるくくとみえつるはこのもかのもにたれかつげ、ん

42 花のいろのこきをみずとてきたるみのおろかに人は思ふらんやは

さこく 此題不載『新六』

43 春はきてきのふばかりを浅みどり色はけさこく野は成にけり

44 はる雨にしめぞゆふらし花にけさこくは花えて咲みちにけり

45 秋の、はねこじにこじてもてぬともいはほのたねはのこしやはせぬ

是は物名にあらず。さこくを見てよめる歟。

(古・友、二〇二三)

(本云・貫、家ナシ、二〇二四)

(新勅雑哥、二〇二五)

(拾〇、二〇二六)

(古遍、二〇三二)

(本云・貫之、家ナシ、二〇四三)

(古・貫、家なし、二〇三四)

(拾・伊、家、二二七〇)

(未、二二七二)

(伊勢集、二二七二)

(未、二二七八)

(未、二二七九)

(未、二二八〇)

かたばみ 此題不載『新六』 酢漿 和名 加太波美

46 あふことのかたばみくさもつまなくに 本(以下欠) (未、二二四一)

あべたちばな 不載『新六』

47 わぎも子にあはで久しくむましたのあべ立花のこけおふるまで (万十一、二四三七)

△和名云、橙似柚而小者也。和名、安倍太知波奈。『新六帖』アツ立花トヨメルハ、「へ」ヲ「つ」ニ  
アヤマレル歟。仍而不載哥。

かひ 不載『新六』 和名、卯 加比古

48 あしたづのかひこめくつるすごもりのつひにかへらぬ身とやなりなん (未、二六〇九)

49 鳥のこはかへりてのちぞなけれ身のかひなきを思ひしりつ、 (同、二六一〇)

50 とりのこはみなひな、がら立ていぬかひのみゆるはすもり也けり (拾〇、二六一一)

51 すもりごもいでにけるかとみる時はかひなき身さへうらやまれける (忠見集、二六一二)

すなわち、「雑のくさ」「りうたむ」「かひ」が各々、四首、「おんな」「きちかう」「かにひ」「さこく」が各々、

三首、「くさのかう」「くたに」が各々、二首、「さうび」「かたばみ」「あべたちばな」が各々、一首のとおりで、

さきに1〜20の例歌の事例で指摘した八例を加えると、本六帖に示される五首未満の例歌(証歌)群は都合二十例となる。ということとは、本六帖に収録する総歌題五百五十題から二十題を減じた五百三十題には、五首の例歌(証歌)

が付されていることを意味しよう。

ところで、本六帖に収載される例歌(証歌)の出典(原拠資料)はいかなるものであろうか。この点については「此見んやう」に、「一 歌は證となるべきをのす。『新撰』、又は余集よりいだせるは、是も『てん』をかく。」と記述されているので、例歌は必ずしも、『古今六帖』と『新撰六帖』に限定されているわけではないことが明らかにな

ろう。そこで、本六帖に収録の例歌（証歌）を調査してみると、以下に掲げる詠歌については、『古今六帖』『新撰六帖』からの抄出でないことが判明する。

- |    |                                |                   |
|----|--------------------------------|-------------------|
| 52 | ありふればもろこしならぬわが国もとらの口をばえやはのがる、  | (夫廿七、五二五)         |
| 2  | あえしらぬみむろの峯のねなし草百夜いでませわがいたるまで   | (千・小大進、一九五四)      |
| 5  | も、夜草も、よまでなどのめけん仮そめぶしのしぢのはしがき   | (六百番・顕昭、一九五七)     |
| 11 | さしも草さしもしのばぬ中ならば思ひありともいはましものを   | (同〈夫木廿八〉・俊成、一九六三) |
| 12 | かんつけのいならの沼のおほる草よそにみしよは今こそまされ   | (万十四、一九六四)        |
| 13 | 河千鳥なくや河べのおほる草すそうちおほひ一夜ねさせよ     | (清輔集、一九六五)        |
| 29 | しら露のいかにそむれば草のかうおく度ごとに色のますらん    | (元真集、二〇一九)        |
| 32 | あだ人のながきちかうな花うゑそにほひもあへず折つくしけり   | (拾〇、二〇二二)         |
| 36 | 川上にいまよりうたむあじろにはまづもみぢばややらんとすらむ  | (拾〇、二〇二六)         |
| 42 | 花のいろのこきをみずとてきたるみのおろかに人は思ふらんやは  | (伊勢集、二二七二)        |
| 50 | とりのこはみなひなゝがら立ていぬかひのみゆるはすもり也けり  | (拾〇、二二一一)         |
| 51 | すもりごもいでにけるかとみる時はかひなき身さへうらやまれける | (忠見集、二六一二)        |
| 53 | 音羽山木下陰にかほ鳥の見えがくれせしかほぞ恋しき       | (伊七、家、二六七二)       |
| 54 | めづらくつばめ軒ばにきなるれば霞がくれにかりかへるなり    | (夫木・野宮左大臣、二六八九)   |
| 55 | かぞいろはあはれとみらんつばめだにふたりは人にちぎらぬ物を  | (同〇、二六九〇)         |
| 56 | 春をこふる心にいかゞつばくらめかへる野中の秋のゆふぐれ    | (同・後京極、二六九二)      |
| 57 | 二月のなかばになるとしりがほに早くも来けるつばくらめ哉    | (同・定家、二六九二)       |

以上、すでに引用済みの例歌（証歌）も再掲して当該関係歌を紹介したが、この整理によって、本六帖には十七首の『古今六帖』『新撰六帖』に収載をみない出典（原拠資料）が収められている実態が明らかになった。ということは、本六帖に収載の総歌数二千六百九十二首から十七首を減じた二千六百七十五首が、『古今六帖』『新撰六帖』から採録されている実態が明白になるというわけだ。

ちなみに、この数値は、たとえば、本六帖の集付（出典注記）に「未」とある、

58 初秋の空に霧たつから衣袖の露けきあさばらけ哉

（はつあき、未、一一六）

の58のごとき例歌（証歌）については、じつは、『古今六帖』に収録されている（一二九）詠歌なので、この場合、本六帖の集付に関係なく、『古今六帖』を原拠資料とみなして処理した結果である点を断っておきたいと思う。

そこで、本六帖は『古今六帖』『新撰六帖』の両類題集から、どのような割合で抄出しているのかを調査してみると、次の（表1）のごとき結果を得ることができる。

（表1） 本六帖の出典資料一覧表

作品 部類	第一帖						合計
	古今六帖	新撰六帖	その他	合計	第一帖	第二帖	
古今六帖	三三八	二九四	二一一	八〇	三五六	四二五	一七〇四首
新撰六帖	一六二	一二八	八九	二五	二三四	三三三	九七一首
その他		一				一六	一七首
合計	五〇〇	四二三	三〇〇	一〇五	五九〇	七七四	二六九二首

この（表1）によると、本六帖は『古今六帖』から千七百四首、『新撰六帖』から九百七十一首、その他から十七首抄出していることが知られる。ちなみに、この数値は、本六帖に『古今六帖』が六十三・三パーセント、『新撰六帖』が三十六・一パーセント、その他が〇・六パーセントを各々、占める割合を明らかにしている。換言すれば、本六帖は類題集の嚆矢たる『古今六帖』からの収載歌を基本にして、『新撰六帖』歌、その他をその補完材料にし

て成立していると言えようか。

なお、その他の十七首の出典を本六帖の集付によって紹介しておけば、『夫木抄』が六首（11・52・54・57）、『拾遺集』が三首（32・36・50）、『伊勢集』が二首（42・53）、『万葉集』（12）『千載集』（2）『六百番歌合』（5）『清輔集』（13）『元真集』（29）『忠見集』（51）が各々、一首となろうが、ちなみに、『万葉集』『六百番歌合』『清輔集』『元真集』の収録歌と『伊勢集』の53の詠は、いずれも『夫木抄』にも収録されている事実を言い添えておきたいと思う。

それでは、本六帖に収載される、これらの三種類に分類される例歌（証歌）の詠歌作者は、いかなる歌人であろうか。まずは『古今六帖』に収載される歌人から検討したいが、その際、たとえば、「七日の歌」の題で、集付（出典注記）に「拾（遺集）○」とある、

59 わびぬれば常はゆゑ、しきたなばたもうらやまれぬる物にぞ有ける（一二二）

の59の歌や、「あやめぐさ」の題で、集付に「本云・貫之、家（集）・ナシ、続古（今集）・貫（之）」と注記する、

60 水がくれておふる五月の菖蒲草かを尋ねてやひとのひくらん（九六）

の60の歌の扱いについては、詠歌作者が『古今六帖』では、各々、前者が「ふかやぶ（深養父）」、後者が「読人不知」とあって異同が認められ、要するに、『古今六帖』収録歌の詠歌作者については未確定要素が多く、決定的証拠に欠けていると言わざるを得ないのだ。したがって、『古今六帖』歌の詠歌作者の決定については、『古今六帖』（『新編国歌大観』所収本）の記述に依拠して判断したことを断っておきたいと思う。

さて、本六帖に収載される『古今六帖』歌を概観すると、圧倒的に多いのが詠歌作者不詳のいわゆる「読人不知」歌群である。それは本六帖の収載歌千七百四首のうち、千百七十二首に達しており、その比率は六十八・八パーセントを占めている。まさに『古今六帖』からの抄出歌は「読人不知」歌群のオン・パレードといえようが、参考ま

で、『古今六帖』抄出歌の歌人傾向を知るために、残りの五百三十二首の詠歌作者を調査してみると、総勢百二十名に及んでいることが知られる。ただし、一首収載歌人が大半を占めているので、便宜的に三首以上の収載歌人を整理、一覧してみると、次の(表2)のごとくなる。

(表2) 『古今六帖』から三首以上抄出される詠歌歌人一覧表

詠歌作者		詠歌作者		詠歌作者	
歌数		歌数		歌数	
1	紀貫之 一六一	8	紀友則 一三	17	藤原忠房 五
2	伊勢 五四	10	遍昭 一〇	18	阪上郎女 四
3	凡河内躬恒 四三	10	清原深養父 一〇	18	阪上是則 四
4	柿本人麿 四一	12	藤原敏行 八	20	山部赤人 三
5	大伴家持 二二	13	笠女郎 七	20	藤原関雄 三
6	素性 二一	13	小野小町 七	20	藤原兼輔 三
7	壬生忠峯 一七	13	藤原興風 七	20	大江千里 三
8	在原業平 一三	16	在原元方 六	合計	四六五首

この(表2)によって、『古今六帖』収載歌人では、『古今集』の撰者である紀貫之が断然トップで、同じく凡河内躬恒・壬生忠峯・紀友則などの撰者、および伊勢・素性・在原業平・遍昭などの古今集歌人が続くなか、『万葉集』では、編者の大伴家持を凌駕して柿本人麿がトップの位置を占めながら、笠女郎・坂上郎女などと続き、当然のことながら、『万葉集』『古今集』の著名歌人の名が勢揃いしている実態が見て取れるであろう。

ちなみに、二首以下の収載歌人についても掲載しておく、以下のとおりである。なお、「西院」「天帝」「大納言」など、固有名詞が特定しない場合は、そのままの表記で示しておいた。

〔二首収載歌人〕 在原滋春・在原行平・忌部黒麿・兼芸・志貴皇子・衣通姫・平貞文・高田女王・橘諸兄・春

道列樹・藤原因香・藤原冬嗣・源重之・源順・源宗子・湯原王

(一六名)

〔一首収載歌人〕 厚見王・安倍仲麻呂・安倍虫麿・荒原棟梁・有間皇子・石川王・石川女郎・石川広成・石上乙麿・宇多法皇・海上女王・大江朝綱・大春日師範・大津皇子・大伴郎女・大伴像見・大友黒主・大伴三衣・大中臣頼基・大伴百代・大伴安麿・大宅女・遠智王女・小野老・小野小町が姉・小野千古・鏡王女・香具山の花子・笠金村・兼覧王・紀飯麿・紀郎女・紀皇女・紀淑望・光孝天皇・西院・酒井人真・桜井大君・薩妙観命婦・沙弥尼・神退・神武天皇・駿河丸・聖武天皇・大納言・平中興・高橋安麿・高安王・高市黒人・天智天皇・天帝・舍人皇子・中務・長忌寸奥麿・額田王・藤原朝忠・藤原敦忠・藤原勝臣・藤原言直・藤原実方・藤原実頼・藤原高遠・藤原時平・藤原仲平・藤原直子・藤原後蔭・藤原好風・文屋朝康・文屋康秀・平城天皇・源常・源信・源能有・壬生忠見・三輪の御・元良親王・文武天皇・山口女王・山上憶良・弓削皇子

(八〇名)

次に、本六帖に収載される『新撰六帖』からの抄出歌九百七十一首の詠歌作者について、各帖別に検討を加えると、次の(表3)のごとき結果が得られる。

(表3) 『新撰六帖』から抄出された詠歌歌人一覧表

作者	部類	第一帖	第二帖	第三帖	第四帖	第五帖	第六帖	合計
藤原為家		三四	二一	一五	四	四一	四六	一六一首
衣笠家良		三一	二四	一七	六	五二	六八	一九八首
藤原光俊		三五	三〇	二一	八	四九	八四	二二七首
藤原信実		二九	二七	一二	四	三〇	五八	一六〇首
六条知家		三三	二六	二四	三	六二	七七	二二五首

この(表3)によると、『新撰六帖』の主催者および企画推進者と推測される、衣笠家良と藤原為家の詠歌を凌

駕して、藤原光俊と六条知家のそれが収録されている実態が明瞭になるが、その確たる理由については、藤原信実が最少抄出歌人である理由とともに、明確にしえない現況にある。

最後に、『古今六帖』『新撰六帖』以外からの抄出歌十七首の詠歌歌人については、次のとおりである。

読人不知（一首は『柿本人麿集』に入る） 五首、伊勢 二首、壬生忠見・藤原元真・藤原清輔・藤原俊成・

花園左大臣家小大進・顕昭・徳大寺公継・藤原良経・藤原定家・藤原基家 一首。

以上、本六帖に収載される詠歌作者について、『古今六帖』『新撰六帖』その他の三種類の出典別に整理、一覧したが、何故にそのような結果になっているのか、その動向については、現時点ではそれほど明確な説明をなしえない状況にある。

## 五 編纂目的、成立などの問題

さて、本六帖の歌題、例歌（証歌）などについては大略、以上のとおりだが、それでは、本六帖はいかなる目的で編纂されたのであろうか。次に、本六帖の編纂目的、成立などの問題について検討を加えてみよう。

まず、本六帖の編纂目的については、幸いなことに、小川布淑の序文と編者の小沢蘆庵の跋文が存するので、それらを手掛かりとして、この問題を考えてみよう。

まず、小川布淑の執筆になる序文を掲げると、次のごとである。

千葉破かみの、はじめ給へるより、うつせみの世にある人のよみとよめりし哥に、題といふことのなくてやは。しかあれど、ならのはの名におふ宮のころはひまでは、見るにつけ聞につけて、うれしともうしと思ふ心の、やがて題なめれば、さるかどしき名もあらざりけり。



大八洲にうまるゝ人の、みくにぶりの歌よまんに、ならふべきことわりをながめれば、歌書といふがありとも聞えざりしを、萬えふしふあらはれてより、延喜、天曆の朝廷にいたりて、しき嶋のやまとみことの道、さく花のにほふがごとく盛になりにければ、上中下にもてあそばれしあまりとも有べし。かうもあるべからんことゝもを、あらましにさだめて、だいたもせられけるなるべし。

代うつりては、花をゝり、霍公鳥をまち、月にあくがれ、雪をわくる類ひの、けふ有べきを集めて、百千のだいさへ出くるやうには成にけむ。

かくなりての、ちくは、題まうくるをむねとてもはやして、見聞につけてよみいづるかたは、外ごとのやうに思へるは、かへりてひがごとくにこそあめりけれ。

『古今六帖』は、くさくの題をあとりたて、何くれのうたを集めれば、あつめし歌の、たてたる題にうときもみゆれど、ふるくよりだいかきなべたるはじめとすべし。

今は哥よまむずる便とさかしだちたる書の、文車になゝくるま、学窓をもふたぐばかりありければ、題かうがへよまんにともしからねど、あぐる歌の近世の躰がちなれば、いにしへ好むくせあるどちは、猶くちをしとひたぶるにかの『六帖』を、目なる、ものにはなしつ。

そも巻の数あれば、もてなやまる、折のおほかるを、いかゞはせん、とわびあへるに、いんさきかゝる物かいおけりと、たまくしげ二とちにしつるを、わたつみのおきなの見せられけるなむ。旅行にも、たるべく、他席に披きみんもわづらはしからぬがうへに、『六帖』に歌のすくなきは、ことぶみよりとうで、題ごとに五首を出されぬれば、詞林に分いるため、になきしをりとしきりにこひて、桜木にゑらすならし。

かくて思ふに、皇国ぶりの哥ならふ人々の、石上ふるきを本として、よみとよまんに、むらぎもの心たらひなるべかめれば、よそこほひのまゝに、ゆゑよしをのぶよしが、はしにかくもをこなりけりや。

(小川布淑)

すなわち、小川布淑の序文の趣旨は大略、次のとおりだ。そもそも神代の昔より、人が詠じた歌に題がなくていいものだろうか、と序文の筆者は問題提起するものの、実際には、歌は「ならのは名におふ宮」の頃までは、対象に接した際に生じる感動を直情的に表出する実詠歌であったという。それが『万葉集』が生まれ、醍醐天皇の『古今集』、村上天皇の『後撰集』が撰集されるに及び、和歌の道が隆盛して、身分の上中下を問わず和歌が愛好されはじめて、日常生活の次元を越えて、頭のなかに描きうる、いわゆる虚構の世界を「あらましにさだめ」た結果、「題」というものが創出されて、その後、院政期のころには「百千の題さへ出でくるやう」になった、と序文の筆者は、「題」の成立史に言及している。

そのような状況のなか、実詠歌に代わって主流をしめてきたのが題詠歌だが、序文の筆者・小川布淑はいみじくも、「古くより題書き並べたるはじめ」ての類題集として『古今六帖』の存在をアピールしているのだ。すなわち、時代は下って近世になると、題詠歌の手引き書も大量に出回って不自由はしないが、「あぐる（証）歌の近世の躰がちなれば」、「いにしへ（の歌）を好む癖あるどち」には、慣れ親しんだ『古今六帖』が最愛の参考文献だと推奨するのである。

ただし、『古今六帖』は巻数も多く、携帯には不便だと思案していると、師の小沢蘆庵翁から当該書を「二とちにしつるを」披露され、それは『古今六帖』の主要部分を中心に、「六帖」に歌の少なきは、異文より」抄出して、「題ごとに五首」を補訂した袖珍本であったので、これは「旅行にも持たるべく、他席に披き見むも煩はしからぬ」最適の類題集と判断して、版行に及んだというのだが、要するに、本書は「皇国ぶりの歌習ふ人々の」参考となるべき「古き（歌）を本として」提供される類題集だというわけだ。

ちなみに、小川布淑については、『日本人名大辞典 1』（昭和五四・七復刻版題一刷、平凡社）の当該記事が有益と考慮されるので、次に引用しておこう。

オガワヘイリユー 小川萍流（一七五六—一八二〇）徳川中期の国学者。宝暦六年生る。通称勇、初め布淑といひ、九々園と号し、のち薙髪して萍流といふ。和歌を小沢蘆庵に学び、その門下四天王の一人といはれた。文政三年二月二十七日没、年六十五。その著に『雅俗弁』がある。（窪田）

ところで、この小川布淑の序文は、師の小沢蘆庵の跋文に依拠して執筆された内容と推察されるので、次に、当該跋文を掲載すれば、以下のとおりである。

『古今六帖』の哥はいとゆうなれど、作者よりはじめて、おほつかなきことおほかれれば、なべてはもてやさぬなるべし。さるを、契沖あざり撰集、家集、本書、他本の異同をしるし、あやまれるをたゞし、おちたるを補ひ、又、『拾遺六帖』をあらはし判せられたるより、くらきにともし火を得たるがごとくなり。

されど、あまりにことしげ、れば、これをみつが一つにして、袖のうちの玉になさばやとて、題ごとに五首づ、かくに、題によりてむげに哥のすくなきもあれば、同じ題にてよめる、ちなみに、いと後のものなれど『新撰六帖』をもて書つく。それにもなきは、他本をもてよりく補ふべし。いづれもくよかめれど、おろかなるわが心に、ことわりのたゞしく、詞のきこえやすきをとりいづ。

もとより我めひとつにみん物なれば、とまれかくまれとて、いにし安永といひしとの初つかたかきおいたるを、此ごろ、同志の人のせちにこふに、いなみがたく、再校して梓にのするは、かたぐにかきやる筆の労をたすけんとなり。老耄のあやまり定ておほかるべし。みんなその心したまへ。

寛政七年仲冬廿日

洛東図南亭において、小沢蘆庵しるす。

さて、この跋文の趣旨は、次のとおり。すなわち、小沢蘆庵は『古今六帖』の歌は優雅ですばらしい詠作が多いが、詠歌作者をはじめとして不分明な点が少なくないので、総じてそれほど評判を得ていないのである。しかしながら、契沖阿闍利が他出文献との本文異同や、誤謬の訂正、遺漏の補正をする一方、『拾遺六帖』を刊行して、それ

にコメントを付すなど、『古今六帖』について内容面での整備を行なったのは有益であった。

だが、それらはあまりに煩瑣な内容であったために、内容を三分の一度に圧縮したうえ、例歌（証歌）も原則、五首と定めたが、題によって不足の場合は、『新撰六帖』やその他によって補遺した。これらの編纂作業はほぼ満足のゆくものであったが、要するに、蘆庵は自己の尺度——内容が表現構想のうえで道理にかなひ、表現も読み手に理解しやすい措辞であること——に従って、本六帖を編纂したというのだ。

換言すれば、本六帖の編纂は、ひとえに蘆庵自身にとつてのみ必要な「六帖題」の類題集であったために、安永年間（一八七二〜八一）のはじめのころ、当該書を編纂したまま放置していたが、近頃、「同志の人のせちに請ふに否みがたく」て、再校して、寛政七年（一七九五）十一月、跋文を付し、同八年正月、小川布淑の序文を添えて、上梓したのが、寛政九年六月であった、という成立の経緯をもつのである。

以上、小川布淑の記した序文と小沢蘆庵の手になる跋文を掲載したが、両者の関係は、すでに明らかなように、蘆庵の跋文に基づいて布淑の序文が執筆されているという関係にある。この両者の記述を総合して、改めて本六帖の編纂目的と成立の問題を整理しておく、次のごとくならうか。

まず、近世中期ごろ、詠作の手引きとなりうる例歌（証歌）を想定したとき、候補にのぼるのが、古代の趣があった、優雅な詠作を集成している『古今六帖』ではないかと考えられたが、『古今六帖』そのものは題も例歌（証歌）も大量すぎて、身近な簡便で携帯自由な手引き書としては少々、不都合であろう。このように布淑が思案に余っているとき、師の蘆庵から原著を三分の一度に圧縮して、他本で増補した内容の二冊本を提示されて、これこそ「二無き菜と頻りに（蘆庵に）請ひて」、上梓して、江湖に提供したのが本六帖である、という次第である。

要するに、本六帖の編纂目的は、「皇国ぶりの歌習ふ人々の」、「詞林に分（け）入るため」に参考となるべき、形態的には携帯自由で、簡便な、内容的には『古今六帖』を中核とした、優雅で趣のある「古き（歌）を本として」

編集された類題集の作成にあった、とほぼ規定できるのではあるまいか。

次に、本六帖の成立の問題については、先述のとおり、ひとえに蘆庵自身にとってのみ必要とされた「六帖題」の類題集を、蘆庵が安永年間（一七七二～八二）のはじめのころ、編纂して草稿のまま放置していたが、その後、「同志の人のせちに請ふに否みがたく」て、蘆庵が再校して完成させた清書本に、寛政七年（一七九五）十一月、跋文を付したものに、同八年正月、小川布淑が序文を添えて体裁を整えた結果、本六帖が一書として成立したのである。そして、本六帖は寛政九年（一七九七）六月、京都の書肆、吉田四郎右衛門によって上梓され、広く江湖に提供されたのであった。ちなみに、本六帖が天保十一年（一八四〇）初春、名称を『類題和歌六帖』と改めて、再版本として刊行されたことについては、すでに言及したとおりである。

最後に、本六帖の「六帖題」における位相に言及しておこう。ちなみに、「六帖題」を内容とする主要な書目を列挙するならば、おおよそ次のとおりである。

貞元元年 (976)	以後	古今六帖 (編者未詳)
寛元二年 (1244)	以後	新撰六帖 (衣笠家良編か)
建長元年 (1249)	十二月	現存和歌 (編者未詳)
建長二年 (1250)	九月	現存六帖 (真観編か)
元禄四年 (1691)	二月	和歌拾遺六帖 (契沖著)
安永元年 (1772)	頃	袖中和歌六帖 (小沢蘆庵編)
天明元年 (1781)		六帖題苑 (林諸鳥編)
寛政三年 (1791)	刊	古今六帖題苑 (契沖編)
寛政八年 (1796)	九月点	六帖題四十首点取 (藤原千任・桑門雨岡・清水浜臣著)

- 天保十一年 (1804) 古今和歌六帖校本 (伴直方再校)  
 文化三年 (1806) 二月 古今六帖考證拾遺 (吟狎園書写)  
 文政六年 (1823) 序 古今六帖紀聞 (度会秀俊注)  
 文政九年 (1826) 頃 六帖類句 (岡本保孝編)  
 文政九年 (1826) 頃 新撰六帖攷 (岡本保孝考証)  
 天保二年 (1831) 刊 古今和歌六帖標註 (山本明清著)  
 天保 (1830~43) 頃 二六類句 (岸本由豆流編)  
 天保 (1830~43) 頃 新撰六帖類標 (岸本由豆流編)  
 天保十一年 (1840) 刊 類題和歌六帖 (小沢蘆庵編)  
 文化~天保 (1804~43) 頃 古今六帖類抄 (編者不詳)  
 文化~天保 (1804~43) 頃 新撰六帖類語 (編者不詳)  
 天保十三年 (1842) 以前 六帖題和歌 (垂元著)  
 安政二年 (1855) 六帖題詠 (鬼島広蔭著)  
 安政三年 (1856) 以前 古今六帖頭字部類 (足代弘訓編)  
 慶応二年 (1866) 以前 古今六帖類標 (片岡寛光・黒川春村編)
- すなわち、六帖題の嚆矢たる『古今六帖』が貞元元年から天元年間(九七六~九八二)ごろ成立して以来、『枕草子』などに発想、素材面で影響を及ぼしたが、中世に至って、その後統として、寛元元年(一二四三)十一月から同二年(一二四四)六月ごろ、『新撰六帖』が、建長二年(一二五〇)九月、『現存六帖』が、さらに内容はともかく、正嘉二年(一二五六)から正元元年(一二五九)九月以前に、名称を模した『東撰和歌六帖』などが各々、

陸続した後は、この系統の類題集は意外なことに、低迷を続けた模様である。

ところが、近世に入り、元禄四年（一六九二）二月、契沖が『古今六帖』の部類面の考証、『新古今集』以降の勅撰集や諸歌集との重出歌の検討などを行なった、『和歌拾遺六帖』を著したあたりから、『古今六帖』への関心が再興した結果、その契沖の成果に基づいた本六帖が、安永元年（一七七二）ごろ、小沢蘆庵によって成立し、寛政九年（一七九七）六月、刊行されたのであった。本六帖は天保十一年（一八四〇）初春にも再版されたが、『古今六帖』を中核に、『新撰六帖』その他の歌書を補遺とした、「六帖題」の類題集としては、嚆矢と位置づけられる書目であった。

ところで、寛政八年（一七九六）九月に成立の『六帖題四十首点取』は、藤原千任・桑門雨岡・清水浜臣らの『古今六帖』題による詠作であったが、この系列下に位置づけられるのは、わずかに天保十三年（一八四二）以前に成立の垂元の『六帖題和歌』と、安政二年（一八五五）に成立の鬼島広蔭の『六帖題詠』くらいに過ぎなかったのだ。

一方、天明元年（一七八二）、林諸鳥編『六帖題苑』が『古今六帖』歌を嚴撰した再編本を上梓するに及び、寛政三年（一七九二）、契沖編『古今六帖題苑』が刊行され、文政九年（一八二六）頃、岡本保孝編『六帖類句』が、天保（一八三〇～四三）ごろ、岸本由豆流編『二六類句』（『新撰六帖』を含む）、同『新撰六帖類標』が、文化（天保（一八〇四～四三）頃、編者不詳の『古今六帖類抄』『新撰六帖類語』が、安政三年（一八五六）以前に、足代弘訓編『古今六帖頭字部類』が、慶応二年（一八六六）以前に、片岡寛光・黒川春村編『古今六帖類標』が各々、成立して、編集面で活況を呈する現象と拮抗して、文化三年（一八〇六）二月、契沖の考証本を吟狎園が書写した『古今六帖考証拾遺』が、文政六年（一八二三）の序をもつ、渡会秀俊が『古今六帖』に注を付した『古今六帖紀聞』が、文政九年（一八二六）ごろ、『古今六帖』の題の異同、措辞の注解などについて、浜臣・村上真澄・植村正路らが検討したものに岡本保孝が考察を加えた『新撰六帖攷』が、天保二年（一八三一）、山本明清が『古今六帖』に諸

種の視点から標註を付した『古今和歌六帖標注』が、天保十一年（一八四〇）、契沖の再校本に山岡明阿・真淵らが一校したものに伴直方が再校を加えた『古今和歌六帖校本』が、各々、成立ないし刊行されて、考証を中心とする研究活動も目立ってくるのであった。

これを要するに、本六帖は「六帖題」の成立史のなかでは、『古今六帖』『新撰六帖』その他の諸資料からなる類題集としては、嚆矢たる位相にあると評することができ、その点、本六帖の存在価値はけっして低くないと認められるであろう。

## 六 まとめ

以上、小沢蘆庵編『袖中和歌六帖』の成立の問題について、種々様々な視点から基礎的な考察を進めてきたが、ここで本稿で検討した結果、得られた諸点を、箇条書きにして摘記するならば、おおよそ次のとおりである。

(一) 小沢蘆庵編『袖中和歌六帖』の伝本は、寛政九年（一七九七）刊行の版本が東北大学狩野文庫などに伝存するが、本稿では、宇部市立図書館新井文庫蔵のそれに依拠して、考察を進めた。

(二) 本六帖は総歌数二千六百九十二首を収載するが、それらは第一帖・五百首、第二帖・四百二十三首、第三帖・三百首、第四帖・百五首、第五帖・五百九十首、第六帖・七百七十四首に細分される。

(三) 本六帖に収載される総歌題数は、五百五十題に及ぶが、それらは第一帖・百題、第二帖・八十五題、第三帖・六十題、第四帖・二十一題、第五帖・百十八題、題六帖・百六十六題に細分される。ちなみに、「おほぬ草」「しりくさ」「ねつら草」の三題以外の四百四十七題は、『古今六帖』『新撰六帖』のいずれかに収載される題である。



(四) 本六帖の例歌(証歌)の出典(撰集資料)は、全歌を調査するに、『古今六帖』千七百四首、『新撰六帖』九百七十一首、その他十七首のとおりである。

(五) 本六帖の詠歌作者のうち、『古今六帖』からのベストテンは、紀貫之(一六一首)・伊勢(五四首)・凡河内躬恒(四三首)・柿本人麿(四一首)・大伴家持(二二首)・素性(二二首)・壬生忠峯(一七首)・在原業平・紀友則(一三首)・遍昭・清原深養父(二〇首)のとおり。また、『新撰六帖』からでは、藤原光俊(二二七首)・六条知家(二二五首)・衣笠家良(一九八首)・藤原為家(二六一首)・藤原信実(一六〇首)のとおり。また、その他からでは、読人不知(五首、なお『柿本人麿歌集』に一首入る)・伊勢(二首)・壬生忠峯・藤原元真・藤原清輔・花園左大臣家小大進・顕昭・後徳大寺公継・藤原良経・藤原定家・藤原基家(一首)のとおりである。

(六) 編纂目的は、序文の小川布淑と跋文の小沢蘆庵を総合するに、「皇国ぶりの歌習ふ人々の」、「詞林に分(け)入るため」に参考となるべき、形態的には携帯自由で、簡便な、内容的には『古今六帖』を中核とした、優雅で趣のある「古き(歌)を本として」編集された類題集の作成にあたった、と要約できようか。なお、編者については、跋文から、小沢蘆庵を想定できる。

(七) 成立については、ひとえに蘆庵自身にとつてのみ必要とされた「六帖題」の類題集を、蘆庵が安永年間(二七七―二八二)のはじめのころ、編纂して草稿のまま放置していたものを、「同志の人のせちに請ふに否みがたく」て、蘆庵が再校して完成させた清書本に、寛政七年(一七九五)十一月、跋文を付し、同八年正月、小川布淑が序文を添えて成った。

(八) 版行については、寛政九年(一七九七)六月、京都の書肆、吉田四郎右衛門によって上梓されたが、続いて、天保十一年(一八四〇)初春、名称を『類題和歌六帖』と改めて、再版本として刊行された。

(九) 本六帖の位相については、「六帖題」の成立史において、『古今六帖』『新撰六帖』その他の諸資料からなる類題集としては、嚆矢たる位相にあると認定することができようか。

なお、『袖中和歌六帖』についてはさらに検討を加えなければならない問題もなしとしないであろう。しかし、おおよその基礎的問題について一応の結論を出しえたいまは、それらの残された問題については、今後の課題とすることにして、このあたりで本稿を擱筆にしたいと思う。